

ハイデルベルク信仰問答講解説教42「あなたがたは聖霊の宮」(2012年7月8日 礼拝説教)

【聖書箇所】

神よ、わたしの内に清い心を創造し／新しく確かな霊を授けてください。御前からわたしを退けず／あなたの聖なる霊を取り上げないでください。御救いの喜びを再びわたしに味わわせ／自由の霊によって支えてください。(詩編51:12-14)

みだらな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。(1コリント6:18-20)

【説教】

本日は、十戒の第七戒「姦淫してはならない」に関する問答を読みます。前回の「殺してはならない」に比べると、この姦淫についての戒めは、実はあまり重さが置かれにくいという傾向があります。確かに日本社会において、殺人は法律で処罰の対象になるでしょうけれども、例えば不倫をしたからと言って法で罰せられるということはありません。それゆえに、姦淫という事の重大さに気付かず、浮気の一つや二つというくらいの軽い話で終わってしまう。あるいはそういう奔放さが美德として受け入れられたり、一つの愛の形と理解されるようになる。世に出回るあらゆる小説や映画、ドラマもこの手の話題を好んで取り上げるでしょう。

こういう世の中の風潮の中で、知らず知らずの内に子どもたちもそこに何の罪の意識も感じないまま大人になっていくのです。これが当たり前になっていくのです。情報は氾濫しています。全く無防備に子どもたちは性的な刺激にさらされてしまいます。以前、テレビを見ていて驚いたのは、何人の異性と関係を持ったということを自慢話のように話しているのが学生なのです。そういう中で逆に、教会が不倫やあらゆる性的な乱れを戒めることに対しては、古くさいとか、自由がないと考える人も多いと思います。キリスト教に興味はあるけど、そういうところまで縛られたくないと考える。それは人それぞれ自由ではないか。

しかし自由とは何でしょうか。罪の人間の自由とは、結局、自分勝手に、自分中心に行動することに他なりません。それで人を悲しませたり、傷つけたりするなら、その自由とは一体何かであります。もし一時の快楽のために自然のおもむくままに行動することが自由と考えているなら、それは人間を捨てて動物になっていくということです。わたしたちは人間なのです。神さまが神さまの形に、男と女に造られたのです。そういう人間だからこそ守ることのできる徳目があるのです。ある神学者は、この第七戒がわたしたちに教えている人間として生きる徳目は、誠実さ、忠実さであると述べています。一人の異性に対してどこまで誠実に忠実に生きることができるか。それは人間にしかできないことです。何人と関係を持つというのは、それだけ人間が動物化しているということではないでしょうか。深刻な人間の罪の病がここににあります。

聖書は、この姦淫に関して厳しく戒めております。レビ記第20章10節では、姦淫は死刑に値する罪であるとされます。ヨハネ福音書で姦淫の現場で取り押さえられた女性が主イエスの前に連れてこられ石で打ち殺されそうになる場面がある。それは姦淫がイスラエルの共同体形成に悪影響を及ぼすものだからです。ただ一組の男女の問題だけに留まらない。それはその家族を破壊し、家族を破壊することはその後続くであろう子孫を絶やすこととなります。しいては共同体全体に影響が出てくるのです。

ただ、このことは現実的な問題ですが、根底においてはもっと深い信仰的な問題があるように思います。先ほど、レビ記を

あげましたが、18章では様々な性的な乱れについて取り上げています。その中でこう記されている。「あなたたちがかつて住んでいたエジプトの国の風習や、わたしがこれからあなたたちを連れて行くカナンの風習に従ってはならない」(3節)と。つまりそういう性的な乱れの根底には、唯一真の神さまではなく、他の神々への偶像礼拝がある。神さまを捨てて他の神々へ心向けることを靈的姦淫と言いますが、そういう偶像礼拝に対する警戒があるのです。

以前、説教の中で、信仰と生活との関係の話を行いました。信仰が生活に現れるという話です。十戒の後半、第二の石板の部分は、隣人に対しての務めが記されていますけれども、それは単に隣人との関係ではなく、実は神さまとの関係が問題になっているということ。例えば、「父母を敬え」では、その父母を通して神さまを敬っているかが問われている。もしわたしたちが、自分の両親を軽率にあしらったりするならば、その人は神さまに対しても同じような態度を取っている。また第六戒は「殺してはならない」ですが、もし人が隣人の存在をそのように軽視するということがあれば、わたしたちは神さまを軽視している、神さまを亡き者としている、そう理解することができるのです。

今日の第七戒「姦淫してはならない」も同じです。わたしたちが異性に対して忠実に欠けるならば、わたしたちは神さまに対してもそのように忠実ではなくなる。神さまのみを神さまとすることができないということです。他の神に向かう。考えてみれば、創世記のアダムの話とエバの話も、蛇の誘惑は、神さまが与えたものより、もっと他のよいものを求めるという誘惑に負けたのです。もっと賢くなれる。そこで人間は神さまの約束より蛇との約束の方がよいと判断するのです。だから木の実を食べてしまう。第七戒はそこまで見ている。単に男女の問題ではない。神さまへの忠実さを捨てること。そこに第七戒が警戒する罪の根があります。

今日の問答、問108を読みます。「純潔で慎み深く」という言葉が目を引きます。これはとても良い訳だと思います。唯一の神さまのみを神さまとするという純潔さは、ある意味、多神教の日本の社会では受け入れにくいことかもしれません。あらゆる神話、八百万の神々を信じるという宗教観がある。それは宗教に対する寛容さ、豊かさであると解する。神仏混合ということがあります。近年では、そこにキリスト教も入る。それは結婚式の時です。でもそれは信じているのではない。人間が都合よく利用しているにすぎません。人は自分の願いを叶えてくれる神を求めて神を渡り歩く。次から次へと神を乗り換える。もっとよいものを求めて。もっと自分を満たしてくれるものを求めて。

こういった他のものへの心変わり、心移り。それは自分に与えられたもので満足できないという人間の欲求の深さを示します。それは貪欲と言ってもよいでしょう。際限なく、もっとよいものを求める。でもそれは結局、神さまを失っているからではないでしょうか。神さまを失い、自分が神になっている時に、

わたしたちは際限なく手を出すのです。人のものにも手を出すのです。この罪をわたしたちは自覚しなければなりません。そしてそれゆえに節操がなく、慎み深さを失った人間となってしまふ悲惨。そしてこの感覚こそ姦淫の根にある部分だと思ふのです。

この純潔さ、あるいは先ほど、誠実さ、忠実さということを行いました。今日ではこういうことはほとんど顧みられなくなりしました。それが何か狭いこと、自由がないことのように理解される。しかし御言葉はそこに光を与えます。特に夫婦という関係において相手に対しての誠実さ、そして結婚の約束に忠実であること、それは神さまへの忠実さであり、誠実さを現します。それがすべての関係の基礎となるのです。信頼の基礎となります。この信頼がなかったら社会は成り立ちません。家族は成り立ちません。いつ裏切られるかもしれない。そういう疑いをもって相手を見ることでは真のパートナーとは言えないのです。神さまは助けるために男と女を造られました。その助けとは、お互いが信頼できる関係の中で初めて言えることです。裏切らないという安心が本当の助けなのです。夫婦が、家族が本当に助けになっているか。信頼関係を築いているか。それが問われているでしょう。

問109を読みます。信仰問答は、ただ姦淫の行為だけではなく、その行為を起こさせる心の動きまで見えています。主イエスが山上の説教の中で、「あなたがたも聞いており、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」(マタイ5:27-28)この主イエスの教えの前に、誰も自分の正当性を主張できる者はおりません。そういう罪を誰もが持っている。だからこそ救われなくてはなりません。「体と魂」を清く聖なるものとして保つこと。でもそのようなことが果たして可能なのだろうか。

もちろん人間が、自分の力で清く聖なるものとして自分を保つことはできません。「聖なるもの」というのは、本来、神さまにのみ言えることで、人間には全く不可能なことです。しかしわたしたちは、その聖なるものにあずかることができる。それが信仰による神さまとの一体化であります。この問109で「聖霊の宮」という言葉が出てきます。この根拠となる聖書は、Iコリント6:19以下であります。聖霊、つまり神さま御自身がこの体に宿る。それによって、わたしのこの体が聖なるものとされるのです。

先日、ある席で年配の未信者の方と話をしておりました。キリスト教と云えば、自分の結婚式の時を思い出す。その方はカトリック教会で結婚式を挙げられました。その時の神父の言葉が今でも残っているというのです。その神父は外国人の方だったそうですが、いきなり結婚式で「子宮」の話をされた。子宮とは、言うまでもなく女性が子どもを宿す器官のことです。それだけでも非常に印象深いこと。神父はこの「子宮」という日本語は素晴らしいと言う。「子の宮」と書く。これは神さまが与えた神聖なもの。しかしこの神聖な子の宮が悲しんでいる。子宮を悲しませてはいけない。教会では聖霊を悲しませてはいけないということはよく語りますが、子宮を悲しませてはいけないことはわたくし自身聞いたことがありません。でも改めてこの神父の説教は的を得ていると思いました。姦淫も性的な乱れも、すべてこの神聖な子の宮を汚すこと。子宮を悲しませることなのです。

でも、神さまはそこを御自身の宿る場所とされました。母マリアはイエス・キリストをその子宮に宿すのです。子宮は神聖なものですが、壊れやすく、また人間の欲望によって汚されてしまう、そういう場所でもあります。でも神さまはあえてそこを御自身の場所とされる。その中に宿られた。その弱さを担い、その子宮を救うため。その子宮を悲しませる罪から救い出すためです。

今も神さまは聖霊を与え続け、わたしたちの弱いこの体をあえて聖霊の宮としてくださる。聖霊を宿し、キリストの救いへ

と絶えず導き、この体と魂を清く保つことへ導かれるのです。だからこそ、もうわたしたちは姦淫をしないで生きることが出来る。神さまがイエス・キリストを通してわたしたちを御自身の宮とされたからです。祈りをささげましょう。